Japanese Association for Religious Studies

由教会」の背景には、一夫多妻（蓄妾）と祭祀の問題に対する朝鮮側と宣教師側の異なる認識が生じていた。蓄妾と祭祀の問題を偶像崇拝と悪弊として打破すべき対象として捉えていた宣教師たちは、両者を諦めない朝鮮の教徒たちには教会に通うことは許可しても、洗礼を受ける資格は与えられないという強硬な姿勢を示した。一方、朝鮮の牧師として現場の教徒たちが蓄妾と祭祀の問題で教会から離れていく現状を目の当たりにしていた崔は、蓄妾と祭祀に対する規律を緩和させることで、多くの朝鮮の教徒たちに洗礼の資格を与えるよう主張した。つまり、蓄妾と祭祀をその背景とする崔重珍の「自由教会」は、単なる反宣教師的教会ではなかったのである。それは当時朝鮮に伝播されたキリスト教を伝播する側と受け容れる側の相互作用の中で形成されていく一過程であった。というのは、崔と宣教師の間で蓄妾と祭祀をめぐって繰り広げられる論争は、キリスト教的価値観と教理すなわち、新しい宗教概念に対する朝鮮側の反応であったのである。その反応は、宣教師側のキリスト教的価値観と教理に「同化」しながらも、それらをくつがえす朝鮮側の「抵抗」と「創造」によって繰り返し展開されていく。かかる朝鮮側の予期せぬ「抵抗」と「創造」は宣教師側の朝鮮宣教における政策の変更を余儀なくさせたのである。

日本組合教会の場合も、自由教会との出会いによって、個人への伝道を中心としていた宣教政策から伝道旅行を通した教会中心の伝道政策に変更したのである。そして、自由教会の組合教会への加入を切っ掛けに、朝鮮における伝道の可能性を確信した渡瀬は、朝鮮教化を担うのは日本組合教会しかできないという論理を展開させていく。さらに、「朝鮮民族の教化が多くの外国人」によってなされていることを懸念しつつ、日本に併合された朝鮮民族を教化するのは日本人の手で行うべきであり、それこそが真の併合であることを主張する。かかる渡瀬の朝鮮伝道における論理は、その後組合教会に限った問題ではなく、日本の国民運動として展開させていく。

崔南善と「朝鮮の固有信仰」

沈　熙　燦

本報告は、植民地朝鮮を代表する知識人である六堂崔南善の朝鮮史研究や宗教認識を取り上げて、「宗教的普遍性」の追究を通じて、帝国日本の支配言説に抵抗しようとした崔の論理が、ファシズムに転回していく過程をえぐりだそうとするものである。そのような転向の原因に焦点が当てられていた既存の研究では、崔の議論における「誤認」「錯視」などが豹変という「致命的な結果」をもたらしたと主張されたり、もしくは支配秩序を転覆するための「高度の戦略」であったと評価されてきた。しかし、帝国日本との拮抗関係のなかで生成されていった崔の論理的な曲芸の通底には、「宗教的普遍性」への渇望が一貫しており、であるからこそファシズムの論理に擦りこまれていくことができたのではないかと思われる。

皮肉にも、自らが弛まず主張したように、崔は転向、あるいは豹変したことがなく、つねに朝鮮を中心とする「宗教」を立

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

てようとしたのである。それがファシズムという様態で現れたことは何ら不自然なことではない。ファシズムは植民者の専有物ではないのである。

崔は朝鮮を中心とした地域に孕まれていた「普遍」としての「밝park」思想を提唱することで、「普遍」の原理を帝国日本から「横領」しようとした。それは帝国のイデオロギーの最深部から抵抗の言説を構造化する「内破の戦略」でもあった。「不咸文化」と、その顕現としての檀君信仰という崔の議論は、植民地という現実のなかで帝国の根底を揺さぶる有用な理論的手段になりえた。

しかし、崔の論理は「宗教」概念を用いた抵抗の試みでありつつも、同時にファシズムを定礎するものでもあった。一九三〇年代半ば以降、「東亜新秩序」論を掲げた帝国日本の拡張は、新しい「普遍」原理の樹立を必要とせざるをえなかったが、かつて「不咸文化圏」を主張していた崔の議論は、この作業に的中するものであったのだ。「밝park」思想は、日本の「古神道」として置き換えられたが、それは帝国日本のファシズムに崔の主張が吸収されたことを意味するのではない。「フル」は「밝park」の和語形であったが、朝鮮の「風流」すなわち「プル」という「固有信仰」がここに対応していて、「風流」は言い換えれば「神道」となりうるのである。ここで注意しなければならないのは、「朝鮮の固有信仰」と「古神道」を、「普遍」としての「밝park」の変容された様態としてみなしている点である。帝国日本のファシズムの原理そのものが、「밝park」に据えられているのである。「밝park」は「古神道」から、やがて満州をも内部に抱え込む「大陸神道」へと拡大されていく。

学徒兵に張り合いのある死を誘っていた崔の宗教論は、帝国日本の原理を朝鮮の内側に包摂しようとしたファシストの欲望に他ならなかった。崔によって概念化された「朝鮮の固有信仰」「밝park」は、帝国日本のイデオロギーを乗り越えて、それを混乱させながら、その彼方において「宗教的普遍性」に担保された全体主義的な企画を実現させようとしていたのである。

パネルの主旨とまとめ

磯前順一

宗教概念論は、欧米のキリスト教社会あるいはポストキリスト教社会でこの十五年以上隆盛をむかえた。その代表的論者であるタラル・アサドによれば、プロテスタンティズムと密接に結びついた宗教概念は〈世俗＝政治／宗教＝内面〉といった二分法にもとづくものであり、世俗主義社会の成立と歩みを等しくするものであった。そのような世俗主義は自分たちの社会こそが宗教的に寛容な社会であると同時に民主主義的な社会であり、平等で自由な社会である幻想をひとびとにもたせることを可能とした。それゆえに、個人の内面にもとづいた宗教も信教の自由によって、その社会の構成メンバーには誰にでも等しく保障されるという信念も成立可能になった。

NII-Electronic Library Service